

■ 編集だより

編集後記

先日、国際言語文化研究科の教授と話していて知ったのだが、いま、世界のかなりの地域において、「方言にとって良い時代」が訪れているのだという。近代化とともに国民国家が国を統一していった時代、つまりドイツ連邦が生まれ、オーストリア・ハンガリー帝国が生まれ、大日本帝国が生まれ、という19世紀においては、方言は時代遅れのもの、統一の遅れを示すものとして徹底的に虐げられていた。戦争という形で国民国家が前面に出た20世紀においても、方言はずいぶんと肩身が狭かった。しかし、いまは、どこも方言が元気で、様々な国で方言の地位が向上しているという。文化の厚みを支えるものとして、方言を肯定的に捉える姿勢が、様々なメディアの中に浸透しているということらしい。

確かに、方言はそれぞれ独特のニュアンスを持っていて、その機微は標準語へと翻訳しがたい。「アホとちゃうか」と「バカか」とでは明らかに違うし、「タワケが」もまた違う。方言は、それぞれの地方のメンタリティーと密接に絡みながら、その地方独特の綾を織りなし続けている。

話はとぶが、いま、本学会の英文誌について議論が重ねられ、その刊行が用意されようとしている。われわれの学会が世界に発信できるメディアを持つとすれば、それは実にすばらしいことであるし、世界の各地からそのメディアに投稿が集まり、そこで新しい精神医学が発信されていくことは、私たちにとって悲願と言ってもいい。

そこで思うのは、学会英文誌が刊行された時、この『精神神経学雑誌』が担わなければならないことになる責務のことだ。精神医学は「言語によるやりとり」をその中核にもつ学問である。精神医学における言語のこの特別な位置を考えるなら、日本語の精神医学雑誌のスタンダードとしての本誌の使命は重い。日本語の精神医学用語を育てるという機能を十分に果たすことが、ますます求められるのである。

精神医学は、一方においては臨床の場から、つまりは一人一人の精神障害の当事者から掬い上げられた言葉で、他方においては、各国語から翻訳された医学概念によって、日々鍛えられ続けなければならない。臨床現場と思考とのつながりは丹念に鍛えられた母国語というツールがあって初めて十分に保たれるものであろう。臨床場面で自信をもって使える言葉をわれわれ一人一人が育てていかなければ、そのうち、「まあね」「だいたい」「どうも」といった言葉と外国語だけで臨床をやり過ごすといった事態が現れないとも限らない。

さらに、「ひきこもり」や「ニート」などマスコミが作り出す言葉が即座にわれわれの臨床に影響を与える現状、そして、インターネットにおける精神医学用語の氾濫といった事態を考えると、精神医学用語をある程度コントロールできるメディアを育て続けることは、専門家集団としての学会の大きな任務と考えなければならないだろう。新しい現象を、そして新しい概念を、日本語で消化し、使いやすい日本語として流布させていく力を学会は持ち続けなければならないのである。

やがて、国際化という動きが世界を大きく覆いつくした後、それぞれの母国語の厚みを問われる時代が、いつか、必ずやってくるのではないかと思う。

鈴木國文